

意思決定過程からみた集落ぐるみのサルへの追い払いの阻害要因
 Obstructive factors of chasing monkeys away by rural community from the point of
 view of decision-making process

○東口阿希子* 九鬼康彰** 武山絵美*** 星野 敏**** 橋本 禪****

○Akiko Higashiguchi, Yasuaki Kuki, Emi Takeyama, Satoshi Hoshino and Shizuka Hashimoto

1. 研究の背景と目的

深刻化するサルによる農作物被害の対策として、サルに人への恐怖意識を学習させる追い払いが注目されている。特に集落ぐるみの追い払いが有効とされるが、実際に集団的に取り組まれているケースは多くない。追い払いの実施範囲の拡大には、未実施集落に対する支援が欠かせないが、未実施集落に対する研究はあまり見られず、取り組みに至らない原因は明らかにされていない。そこで、本研究は集落ぐるみの追い払いの未実施集落に焦点を当て、サル対策の取り組みの実態や対策の方法に関する意思決定の過程を把握することにより、集落ぐるみの追い払いへの取り組みを阻害する要因を明らかにする。

2. 対象地および研究の方法

本研究では、田尾（2001）の意思決定モデルを援用し、意思決定の各段階に生じる阻害要因を仮説として **Table 1** のように設定した。仮説を検証するために、集落ぐるみの獣害対策の先進地である三重県伊賀市（水田率 93.7%，2005 年農林業センサス）を対象とし、以下の 2 つの調査を実施した。まず、伊賀市の全区長を対象としたアンケート調査（2011 年 12 月実施、配布数 277、回収率 83.4%）により、サルの被害が深刻かつ集落ぐるみの追い払いを実施していない 24 地区を抽出した。次に、抽出した地区の代表者に対して被害や対策の実態などに関するヒアリング調査（2012 年 8～11 月）を実施した。

Table 1 意思決定の各段階における阻害要因
 Obstructive factors of each stage of decision-making process

意思決定過程	阻害要因
問題の認識	被害程度が低い
	解決意欲が弱い
	優先度が低い
	被害の偏り
情報収集	対策に関する知識不足
	対策支援事業の認知不足
選択肢の評価	追い払いに否定的
	集落ぐるみに否定的
決定	場の不在
	場の機能不全
実行	地形が厳しい
	人手不足
	経験不足
	費用不足
	行政依存

注) 意思決定モデルの「問題の構造化」を「選択肢の評価」に改変している

3. 結果

1) 集落ぐるみの追い払いの阻害要因 **Table 2** に各地区の仮説に対する発言の有無を示す。仮説に対して強い肯定がみられた地区数で比較すると、解決意欲が弱い、追い払いに否定的、人手不足、被害の偏り、の順に多く、これらが集落ぐるみの追い払いの主な阻害要因であると言える。一方、対策に関する知識不足や対策支援事業の認知不足、経験不足、費用不足に該当する地区はなく、これらは阻害要因ではないことが分かった。また意思決定の段階ごとにみると、問題の認識段階でのべ 22 地区と最も多く、大半の地区が問題を認識するという意思決定過程の最初の段階で課題を抱えていることが明らかになった。

*京都大学大学院農学研究科 Graduate School of Agriculture, Kyoto University / **岡山大学大学院環境生命科学研究科 Graduate School of Environmental and Life Science, Okayama University / ***愛媛大学農学部 Faculty of Agriculture, Ehime University / ****京都大学大学院地球環境学堂 Graduate School of Global Environmental Studies, Kyoto University

キーワード；集落ぐるみ、追い払い、サル

Table 2 仮説としてあげた阻害要因に対する各地区の発言の有無
Statement of obstructive factors as hypothesis in 19 communities

意思決定過程	阻害要因	対象地区番号																		強く肯定した地区数	
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18		19
問題の認識	被害程度が低い	○	○	×	◎	◎	△		◎	△	◎	○	×	×	○	△	×	△	△	×	4
	解決意欲が弱い	◎	◎	×	◎	△	◎	△	○	◎	×	△	◎	◎	◎	△	○	◎			9
	優先度が低い			×	△		×		◎		◎		×		×	△	◎	×	×		4
	被害の偏り	○	◎	×	×	◎	◎	△	△	◎	○		×	×	○			◎	△	×	5
情報収集	対策に関する知識不足			×	○	○		×	×	×		×	×		×	○	×		○		0
	対策支援事業の認知不足	×	○	×	×	×	×	△	○		×			○	×	○	×	△	○	×	0
選択肢の評価	追い払いに否定的	○	×	◎	◎	◎	◎	◎	○	×	○	◎	◎	△	×	△	△	×	×	◎	7
	集落ぐるみに否定的	○	○	○	○	○	×	○	×	×	○	○	△	×	△	○	×		△	×	0
決定	場の不在		○	×	○	×			×			×		×		△	×	◎	△	×	1
	場の機能不全	○			×				◎		△			○						△	1
実行	地形が厳しい			○				○	×				○				◎				1
	人手不足	◎	×	◎	○		○	×	○	×			◎		◎	◎			△	◎	6
	経験不足		×	×				×													0
	費用不足														×						0
	行政依存		×	×				○	△	△		○	◎	×	△	○	×		◎	○	2

◎：特に強く肯定した、もしくは繰り返し肯定した ○：肯定した
△：肯定する意見と否定する意見の両方があった ×：否定した 空欄：言及しなかった

2) 主な要因に対する発言内容の特徴 **解決意欲が弱い**：解決意欲の弱さの原因は、自家消費目的の家庭菜園が被害の中心地であり、被害が収入に影響しないことであった。また、農地の委託による当事者意識の欠如も一因となっていた。さらに、転作奨励金や共済による獣害補償金によって、被害を解決しなくても収入が一定程度維持できることも、解決意欲の低下を助長していた。**追い払いに否定的**：簡易な道具を用いた単独による追い払いを実施している地区から、すぐに慣れて逃げなくなることや一時的な効果しかないことが多く指摘された。また、個体数の減少を伴わないため、サル被害を軽減するための根本的な解決手段ではないとの評価が下されていた。**人手不足**：単純に戸数が少ない場合と、地区に人手は存在するが追い払いの参加者が確保できない場合の2種類の人手不足が確認された。後者の原因は、①対策意欲が弱く参加意思がないこと、②高齢者には体力的に困難と考えられていること、③サルの出没は日中に偏るため農業外就業者は参加が困難であること、④予測できないサルの出没に対して即座に人手を確保する必要があること、であった。**被害の偏り**：サルの出没範囲が主に林縁部に限定される場合と、出没は地区全域に及ぶが被害の発生場所は限定される場合の2種類があり、それらが原因で当事者意識に偏りが生じ、サル対策の実施主体にも偏りが生じていた。後者はさらに、家庭菜園や畑等が点在または偏在している場合と、農家と非農家が混住している場合に分かれた。

4. 考察

サルが好んで採食する作物が野菜および小麦や大豆であることから、水田地域における被害発生地は自給目的の畑や転作田に偏る傾向がある。農家はこのような土地利用に対して費用や労力をかけて対策をする価値がないと捉えがちなため、サル被害が解決すべき問題として認識されにくいと考えられる。また、追い払いの効果に対する否定的な意見は、個別の追い払いの実施経験に基づくものであり、効果が過小に評価されていると考えられる。今後、集落ぐるみの追い払いへの取り組みを拡大するためには、サル対策への意欲を醸成するとともに、集落ぐるみの追い払いの効果を正しく認知させる必要がある。

謝辞：本研究は科学研究費（課題番号 23580331、代表：九鬼康彰）を受けて行った。調査にあたって多大なご協力をいただいた三重県農業研究所と伊賀市、そして区長をはじめとする住民の皆様へ深くお礼申し上げます。参考文献：田尾雅夫（2001）：「組織の心理学（新版）」、有斐閣、124-126。